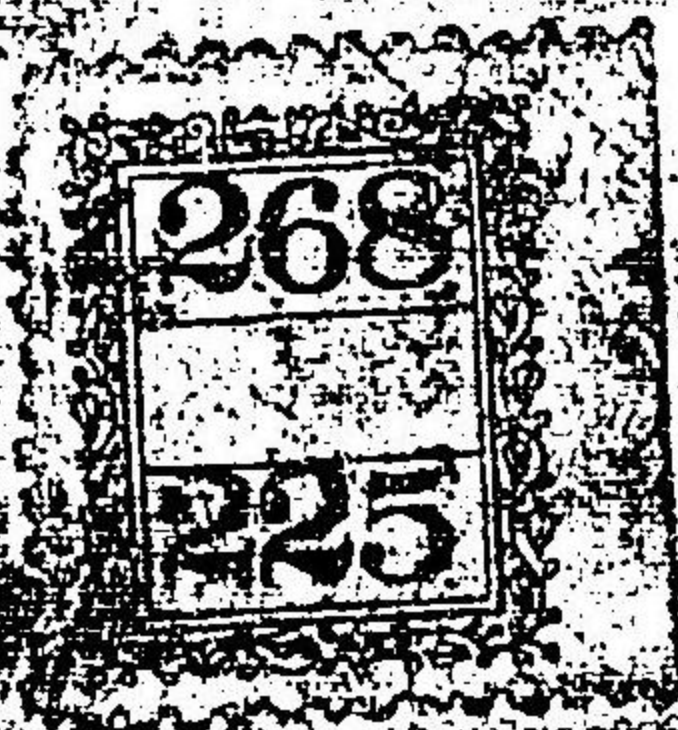


今
月
今
日



014037-000-8

特20-69

今月今日

山下 鏡影/著

M44

ABB-0291



(日念紀る) (重)

一日 明治廿七年十二月 金光教學問所創立、後金光中學校と

改稱

二日 明治四十三年八月 金光教大教會所建築初め

三日 明治四十年十月 金光教布教興學基本財團發表式

四日 安政二年九月 立教の神宣下る○明治十六年十月

五日 神上り○明治卅四年九月 教義講究所創立、金光教々義

六日 講究所は其後を受く

七日 明治十三年八月 金光副管長御誕生○明治十八年六月

八日 神道金光教會を組織す

九日 明治四十年二月 修徳殿開かる

十日 文化十一年八月 教祖御降誕○明治三十三年六月 金光

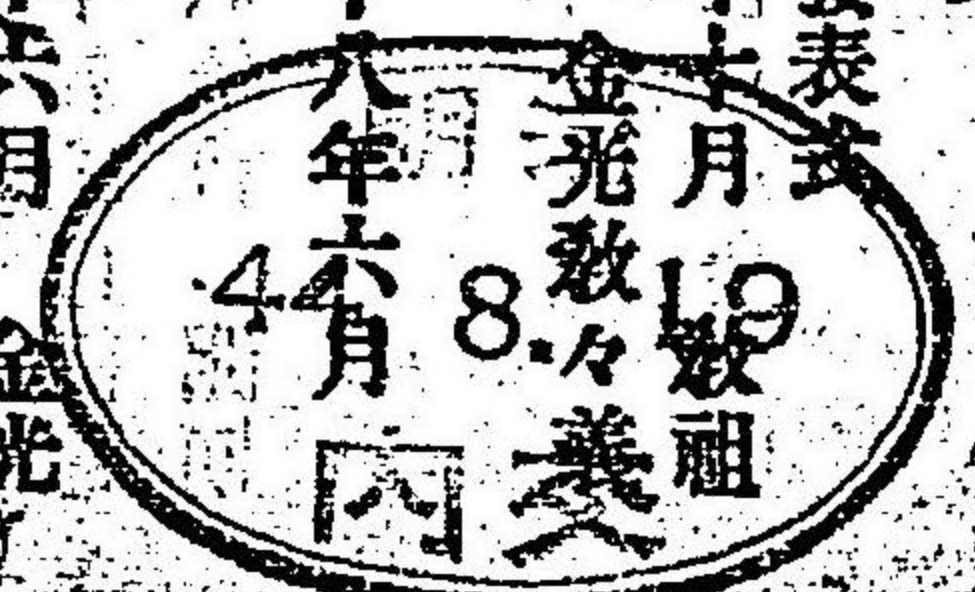
十一日 教別派獨立(卅二年七月廿一日請願着手)

十二日 明治卅三年六月 管長御就職これ本教管長を戴くの初め

十三日 明治廿六年十二月 四神君御歸幽

十四日 嘉永二年四月 管長御誕生

十五日 明治四十年三月 正神君御歸幽



本教年中行事

○一月 △元旦祭 一日。各教會所にて隨意之を行ふ△御用始 五日。本部支部共に教務を開く△新年式 七日八日九日。管長閣下教殿に御臨場、部下教師信者の祝賀を受け一々祝杯を賜ふ△金光教議會 開期未定。定例により召集

○二月 金光教々義講究所別科卒業式 九日△同上入學式 十日

○三月 △春季靈祭 皇靈祭當日。大教會所以下各教會所にて執行△金光中學校卒業式 本月下旬頃

○四月 △大祭 十日。大教會所にて奉仕。本教春季の大祭なり（九日十日夜説教）△招魂祭 十一日。本部庶忠碑前にて執行△親授式 十日

教會所證章及褒賞を親授せらる

○六月 △大赦 三十日。大教會所以下各教會所にて執行

○七月 △金光教々義講究所別科卒業式 二十四日

○九月 △金光教々義講究所別科入學式 十五日△秋季靈祭 春季に同じ

○十月 △教祖大祭 十日。大教會所にて奉仕、本教秋季の大祭なり（九日十日夜説教）△親授式 十日、四月同様舉行

○十二月 △金光中學紀念式 一日。同中學にて舉行△四神祭 二十日。大教會所にて執行△御用仕舞 廿八日。本部支部共に教務を閉づ△大赦卅一日。大教會所以下各教會所にて執行

以上

正月餅の讚

亭主は開白の位にあれば、常に社杯の折目を正して、努め心の膝を崩さず、大の柱の大黒の打出の小槌を振翳して一家の采配をとり、妻は細女の命たれば、いつも嬉の舞をまうて家内和合の神と崇められ、釜の柱のねもごろに、役目大事の手襦をかけて、帯紐の締りも堅く、夫婦が鬮子揃へて搗上ぐる餅が、福徳圓滿の餅、子もち家もち寶もち、心もちもよく、身もちも正しく、世には譽められ、一ヶ年中氣もちの味ひ違はず、神の御前の鏡餅とすれば、曇らぬ御代の姿と喜び給う、今も年の初には、家にもく餅搗きかはして、これが縁喜を祝ふためしとなれるぞ、ありがたくもまた尊き。

曇らぬ御世のすがたの鏡餅ころそろへてつくろうれしき。

今日今日の信心

◎人の心はと問へば、盆に載せた珠のやうなものだと申す、成程傾ける方にコロコロと轉げる、うご下ろ、コロと名けた、これは國學者の解釋であるが、少し悲しきところがあると悲しいといふ一方に傾いて、嬉しく難有いとはあつても、心其處にあらざれば見れども見えず、聞けども聞かずで、稍もすれば天道果して是か非かと叫ぶ、其癖に思惑の一つ二つも違つと、もう此世は吾物のやうに思うて、鼻の前に斷崖の聳立つて居るとも、眼の下に陷罪の穿れて居るとも忘れて有頂天になつて居る、此有様は恰度、學校にシーソーといふ運動機械があるが、それに乗つた小供のやうで乍ち天に昇り乍ち地に降る、其昇る度に笑ひ、降る度に泣く、かくして人生七十七古

來稀なる短かき一生が、狼狽と共に終りを告げる、思へば遺憾千萬なことではござらぬか。

◎たつた一夜を關にして昨日は大晦日、五色の鬼が火の車を曳いて家々を訪問するといふに引更へて、今日は元旦歳の初め、千里同風目出たく吹いて天地は御代萬代の春の色、都の人も鄙人も屠蘇の香に酔うて太平を謠ふの陽氣、正月の三日さへ嬉しければ後の三百六十日は泣いて暮してもよいかと云ひたいほどである、教祖の神は、二百十日に風なきやうにと願ひし信者にむかひ「二百十日さへ無難なれば前後はかまはぬか」と諷め給ひしとか、笑ふにもその根あり、泣くにもその本あつてならばまだしも、シーソーに乗つた小供のやうに、乍ち昇つたといふては手を拍つて笑ひ、乍ち降つたといふては潜然と泣く、かゝる貧しき心に元日を笑ひ、かゝる常

なき心に臘日を泣いたでは、折角太平の腹鼓も打ち甲斐のなきことである。

◎勿論正月を泣いてよいものでせうか、大いに笑うて迎へねばならぬが、只だ正月三日の間ばかり笑ふたではいかぬ、正月のやうに一年中を笑うて暮らす、大きく言へば一生の間笑うて通るのである、泣いて生れて泣いて死ぬるのではなく、笑うて生れて笑うて神上りするのである、お互ひが目的す信心は、元日に笑うて大晦日に泣くやうな信心ではなく、毎日元日のやうな心でニコくとして一ヶ年中を暮らさせて戴く、否一生の間をこの歡喜の心で通らせて戴くのお蔭を願ふ信心である

御理解に

夜あけなば正月と思へ、日暮れなば大晦日と思へ とも亦

いつも正月の心で喜べ、いつも大晦日の心でしまれ

とも仰せられてある、夜が明ければ正月、日が暮るれば大晦日、この心で毎日暮らせば、元日にも大晦日があり、大晦日にも元日はある道理、まことに人にはつねといふ心が大切であり始終といふ考へが大事であります。

◎元來、正月といひ大晦日といへど、廻る月日の上にこの相違があるのではなく、約束や取引の便宜上から、人間が年を定め、月を分ち、日を計へたのである、晝夜には長短があり、時候の上には寒暑冷暖があるが、何も元日が吉日で大晦日が凶日ではない、昔の曆本を見ると、中段下段に吉日凶日を定めてある、今も秘密にはこんなものを賣つて居るが、丁度狐にだまされたものが、土團子をあんころ餅と信じて居ると同じく、これも迷信から割出されて居ることで、毎日お日様が同じやうにお照らし下さる今日の上には、決して吉日の凶日の、お正月の大晦日

のといふ區別はないのである、然るを今日は凶會日だといつては忌み、天社万吉だといつては喜び、今日は大晦日だといつて泣き、元日だといつて笑ふのも、思へば皆吾が心からのことである、そこで教祖の神は

今月今日で一心に頼め靈験は和賀心にあり

と教へ示されてあります。

◎如何にも一日は一年の始め、今日は一生の初め、百歳の長壽も實は今日を三万六千五百二十五回繰返したに外ならぬ、今日も難有うさま、今日も難有うさま、これで三百六十五回眠ませて戴けば、やがて一ケ年中難有く暮らせて戴けたのである、況んや今日あつて明日なきが人の壽命、來年の事を云ふて鬼が嗤へば、明日のことをいうても嘘うであらう、明日々々と云へど明日を見たものはない、明日はと思

て眠ても、目が覺めて見れば最早今日である、古人が教へて、旦に生れて夕に死するを習ひと思へといつて居るが、觀じ來れば實は穿ち得たりで、今日はあつても明日はないかも知れぬ、それを今日／＼も圓い夢から覺めて、キビ／＼と心地よい旭日を拜ませて頂くことが出來たら誠に難有いではござらぬか、人の心として、五十年は百年も生きて幸福でと思ふけれど、實際に活動らいて行く日は只今月今日のみで、過去は過去として將來に向つては、今月今日の外には歳も月も日もないわけである、そこで

昨日を忘れ、今日を喜び、明日を楽しめ

とも教祖の神は御理解下されました。

◎今日何を喜ぶのであるか、明日何を樂むのであるか、從來世には人の呪咀を助く

る悪神があり、人を針金縛にする邪神もあると信せられ、何時祟り咎めを蒙るかからぬといふ恐怖の心より、兎角凶き事を云うて待ち、安き心はなかつたのであるが、教祖の御教によりて天地の大道を伺へば、我身は全く神徳の中に生かされてあるのである、親の養育よりも一層お手厚き天地の養育によつて生かされてあるのである、この道を深く信じ悟りて疑はざる時は、吾等は今日の幸福を喜び、明日の安全を樂むことができるのである、かく吾等は神の光く御徳の中に生かされてあるが故に一層進みて、神恩を感謝しつゝ更に喜びと樂みとを加ふるの道を勵まねばならぬ、それはおかげの種を蒔きそへることで、今日よき信心の種を下して明日のおかけを樂み、明日更に信心をばげみて次に來るべき一層大なるおかけを樂んで待つのである、如何に神徳の中に生かされてあればとて、うを受け戴きて吾が身のおかけに

するとせざるは吾等の信心によるのである、ろこで

今月今日で日に新たに日々に新たなる信心をせよ

と教祖の神は御理解下されてある、これを今日の語で申せば積極的の信心である、毎日々々今日の信心をはげみ、江戸の人は宵越の金を使はぬと申すが、吾々も宵越の信心をせぬやうに日にもく新たなる信心を進めて、月を重ね年を経るに従ひ、おかげにおかげ亦おかげと、愈々加へて行かねばならぬ、それを只神徳に甘へ樂んで待つ心安さに慣れて、日に月に信心を加へて行くことを忘るゝから、おかげの道の中絶は筋違ひをするのでありませう。

◎世には信心とし云へば、萬一のとき、彼處の神此處の佛と立ち騒ぐことだと思つて居る人があつて、平常は信心といふ殊勝な心掛は中々起らぬ、一度お道の信心に

はいつた人でも、鬼もすれば薄らぎ勝ちであるが、サア病氣だとか何とかいへば今更の如くあたふたと神様探し、教會所參拜を初める、是等は皆消極的の信心で、徳を重ねおかげを積むの信心ではない、御神訓に

要心は前からたふれぬうちの杖よ、まめなとも信心の油断をすな

と訓へられてあるが、倒れてから杖を思ひ出しては駄目である、今日は無事なといつて明日のことは計られぬ、倒れぬ内から信心といふ杖をついて、今日もく油断をしてはならぬ、又人情の常として、過ぎたることを繰返しては腹を立て、來ぬ先のことを云うては泣いたり、苦勞に苦勞を重ねるものが多いのであるが、これらも今月今日の信心を勵めばいらぬ繰言である、今月今日の信心を怠れば其處に明日のおかげの綱は断れるけれども、今月今日の信心に油断なければ、おかげの種こる時

けめぐりの種は蒔かぬから、蒔かぬ種は生ねはせぬ、何を腹立て苦をすることがありませう、るこで

心配する心で信心せよ

と諭されました、お互ひに過去を回顧けば、これでも神様のおかけが願はれやうか
 これでお道の人と言はれやうか、罪ども穢れども、譬へば破産して公権を剝奪せられねばならぬ程の大借銭、百万人の人中で懺悔して見ても、また良心の呵責はゆるまぬ、といふほどの心配があるかも知れぬ、けれども最早過去つたことは追付かない、一步進んで今日より、心配する心で信心を勵むのです、及ばぬ愚痴を彼是繰返して居る間に、精々と信心を研ぐべきであります。

◎さて今月今日の信心は如何にするのであるか、如何なる心でするのであるか、と

申して一種異つた名案良法がある筈はない、矢張今月今日で一心に頼むより外はないのである、頼むとは全身を打込んでかゝるのである、只頭の先や足の先ばかりを突込むのではない、全く己を神様の御神徳の中に入れるのである、今更入れると申せば角が立つ、前述したる通り人は皆神徳の中に生かされてあるのである、この事實を覺ると、今まで頼りなさに泣いた心がグラリ打て變つて、難有い、嗚呼難有い神の御光の八方に輝いた中に安らげく寝かされてあるの吾、嬉し涙を臉一杯に湛へつゝ、天を見上げて神の乳房に懐きつく、この眞に難有しと思ふ全身の力を以て神様のおかけの綱に縋るのである、一心とはこの眞に難有しと思ふ心の一筋にである助かるや助からぬや、明日は如何なるであらうかといふ不安心も、思へば己の一心が缺けて居るからである、今月今日の信心と申して此の一心、此のお縫りの外には

ないのであるが、こゝに大きな注意が要するのは、吾はかゝる難有き御神徳の中に生かされてあるのだから、これで安心ちやといふ、譬へば長き旅から歸つた人が、吾が家庭の心安さに氣が緩んでトロリと怠氣が出る、ろんな心になつてはならぬ、譬へば他人の乳房に育てられて孤獨の淋しさに泣いた身が、何かの廻り合せに生母のあることが判り、其の暖かき膝の下に引取られて、今度は親の慈悲にアマへかかる、ろんな心になつてはならぬ、かゝる尊き御神徳の中に生かされて居るのであるから、油断してはならぬのである、怠慢氣を出してはならぬのである、我儘の心を起してはならぬのである、謹慎の心を忘れてはならぬのである、船暈に疲れ果てたる人が陸に上つたやうに、元氣を回復し、勇氣を振り起し、生々として活潑に眞の道を進み、天地に對し國家社會に對して、己が本務本分を盡して行かねばならぬ

この謹慎の心に神のおかげは顯はれるのである、譬へば小さいけれども、日露の大戦役に我が軍人が名譽を世界に博し得たのは、背後に天皇の稜威と、國民の熱誠といふ後援とがあつたからですが、徒らに陛下の稜威に慣れ國民の熱誠に甘へたならば露國の軍人の様に、國をくゞとこがれて兎角退却勝ちとなつたであらうに、流石は日本の軍人なり、陛下の稜威を額上に捧げて楯となし、國民の熱誠に後顧の憂ひを斷つて、勇氣凜烈として猪向に進んだ、この軍人の勇氣と國民の後援とが程よく相俟つたから、戦捷、國運の發展といふおかげは顯はれたのである、吾等の信仰も其處にあるので、教祖は『あいよかけよ』といふ言葉をもつて此事を教へられました吾等は生の親の心よりも尙一層深く厚き天地の神徳の中に活かされてある身なれば何の前後思ひ患ふことがあらう、萬一戰場に疲れ名譽の負傷を受けたる時には、祖

神様教祖の神様が勞り慰めて下さる、いざ今月今日で眞の道を一筋に進まん、この一筋の心の胸一杯に起るとき、一切の不安、一切の恐怖、一切の疑悞の心は消去り心の空晴渡つておかげの光赫々と照り渡ります。

◎そこで今月今日の教は一筋なれども、これを守らせて載く心は千々と分れて今月今日で一心に神の恵を頼みつゝ眞の道を進め靈驗は我が進む心になり今月今日で一心に神の恵を頼みつゝ己の務を働け靈驗は吾が働く心になり今月今日で一心に神の恵を頼みつゝ心の玉を研げ靈驗は吾が研ぐ心になり今月今日で一心に神の恵を頼みつゝ末の榮を樂め靈驗は吾が樂む心になりかく頼む心は一筋なれども受ける、おかげは千々八千々と別れて、神の恩恵に頼む心と共に神のおかげを受くる心が大切で、和賀心に深く注意すべきである、御理解に

祈り心よりも受け心

ども教へられて、神の御恵にお頼み申すと共に、吾受け心を檢べねばなりません。◎皆様、世渡の上にご元日と大晦日とはありますが、信心の上には正月も臘月もありは致しませぬ、日の御照にも神の御恵にも元日と大晦日の區別はありませぬ、吾々の信心にも元日と大晦日を作つてよいものでせうか、今月今日で一心に天地の神徳に頼み縋りつゝ、毎日旦に神恩を歡び、夕に信心を省み、昨日よりは今日、おかげの種を蒔添へて更に明日のおかげを樂みつゝ、いつもく正月元日の心でニコくと喜び勇み立つて其日々を暮らせて戴く、これより結構なことはござりませぬ、勿論一生の間には苦きことも辛きことも多々出て来りませうが、是等は要するに天地の恩寵に外ならず、吾等の信心にして過ちなければ、不幸は却つて幸福

の種となるのであります、吾等信仰の徒は厚く天地の神徳に絶りて以て、彼の徒らに笑ひ、徒らに泣き、短き一生を夢どもに終るが如きことなきやう務めねばならぬ。

いきたくば神徳を積みて長生をせよ

信仰上注意すべきことの二二

◎信心の上中下 信心には上中下の三階級あり、下の信心はおかげをのみ願ひて眞の道を願みず、中の信心はおかげの戴きたるに眞の道を捨てず、上の信心に至つては、神恩奉謝の念に充ち只管誠の道に違はんことを恐る、彼の眞に難有き心とは

この神恩奉謝に充つる心なり、吾等が信心に入るや、先づおかげの目につきたること勿論なれども、次第に教を戴きて中の信心に進み、終には此身このまゝ神徳の中に生かされてあることを覺りて、上の信心に進まざるべからず。

◎信心の深く廣き意義、信心といへば一言にして明かなるが如きも、神訓に「信心する人は何事にも眞心になれよ」と教へられたるを思へば、其意甚だ深く其義甚だ廣きものなることを覺るべく、左に吾等が信心の概表を作り試みたれば、信條と照し合せて各自圓滿なる信心に進むべきものなり。

吾が教派

吾が主神 眞心の道を迷はず失
吾が教義 はず末の末まで教へ
吾が教會 傳へよ
吾が手續

吾が國家

吾が天皇 我身は我身ならず皆
吾が國土 神と皇との身とお
吾が國法 もひ知れよ

吾が信心

吾が社會

吾が恩人 人の身が大事か我身
吾が友人 人が大事か人も我身も
吾が隣人 皆人

信心する人は何事にも
眞心になれよ
眞に有難と思ふ心直に
靈驗の始めなり

吾が家庭

吾が祖先 信心は家内に不和の
吾が家族 なきが元なり
吾が財産

吾が生命

吾が身體 信心は本心の玉を研
吾が精神
吾が言行
吾が職務 くものろや

◎信心を進むるの道

一つ叶へばまた二つとか云ひて、人の慾望は果しなきもの
なれど、信心の道は之に反して中々に進み難きものなれば、左のことどもを深く注
意して日々に反省し、心に怠りの出でぬやう戒め努めて向上發展の道を圖るべし。

- 一 參拜(お参りする事)
- 二 祈念(お願ひする事)
- 三 式典(お祭をする事)
- 四 修養(徳を進むる事)
- 五 誘導(お導をする事)
- 六 會集(會合をする事)
- 七 救濟(人を助くる事)

教會所は信者信心の道場なれば、成るべく足繁くお引寄を蒙り、お願ひお禮のお届
けは勿論、謹んで教を聴き道をたづぬべく、特に大教會所は教祖唯一の靈蹟なれば
遙々參拜して、教恩奉謝の誠意を盡すべきなり▽祈念は神の御心を通はせて戴く道
なれば、至誠を凝して雜念を去り、妄念を斷ち、一意専念もつて朝夕神の御鏡に向

ふべし▽式典は神恩奉謝の誠意より出づる禮なれば、教會所の祭典諸式を尊重し、参拜を怠らざると共に、教信徒各戸にも相應の式典あるべきものなれば、其の精神を失はざるやう嚴肅に執行すべし▽修養は信念を進め徳を高むることにて、説教々話を耳を傾け、教義出版物に眼を晒すは之に進むの道なり、かくて愈々悟りを開き其得るに随つて實踐體得し一白も油断あるべからず、彼の心行もこの意に外ならず▽誘導は世の人をお道に誘ひ教會所に手引することにて、神恩奉謝の赤心と世間同情の道心とより自ら發する事實なり、吾がおかげを難有しと念ひ、人の難儀を氣の毒と思はゞ、努めてお導きをなすべし、一人の人を導き救へば己の徳も随うて進む▽會集は信者同志の交情を温め、信念の統一を圖り、團結一致を促す所以にして、教會と信者の宅とを問はず、時宜を計り機會を求めて屢々行ふを可しとす▽救濟は世

間不幸の人を救ひ助くるの謂にて、精神、勞力、金穀其何れを以てするも可し身分相應に努むべし、同情心は神に通ふ心なり。

◎献備に就て 献備は教恩奉謝の誠意を献るの道に外ならずして、益々教を張り人を導き世を救ひ行くには缺ぐべからざることなり、献る淨財は金と品物とを問はず凡て謝恩の精神を先とし、其心に品物を添ふることを忘るべからず、謝恩の精神なきものは之を不淨の物といふ、献納者の名の現はれんことを求むるが如きは最も卑しき心なり、献備は謝恩の最大の道にして、謝恩は更におかげを進むる所以なれども、精神足らざれば立教の尊嚴を穢すことあり、注意を要す。

◎布教興學基本財團 御道の將來を念ひ、人心教化の實愈々擧らんことを願ふ篤信の信者は、この基本財團の速かに成長せんことを願はざるべからず。

◎教義出版物

本教々義書類の已に出版せられたるもの及び定期發刊物は左の

如し。

神誠正傳 印刷實費七拾錢 金光大教 印刷實費參拾錢

天地の大理 同縮冊八 七拾錢 說教十座 同 參拾五錢

金光教の成立 同 六錢 金光教 同 壹錢五厘

戊申詔書大意 同 四錢 (以上本部藏版)

△注意 本部の出版にかゝるものは販賣物にあらず印刷實費を以て頒布せらるゝものなり

みかげ集 發行所 備中大谷 大教新報社

金光教側面觀 四拾五錢 同 大阪 能勢脩身堂

道のしるべ 參錢 同 但馬豊岡 豊岡教會所

千代乃面影(祖先祭祀帳) 同 備中大谷 藤井光右衛門

(以上私版)

大教新報(毎金曜日發行) 一部參錢五厘 同 大教新報社

新光(毎月一回發行) 一部六錢 同 東京神田區和泉町 金光教青年會

◎祖先の祭祀 祖先の祭祀を重んずるは孝道を全うするの道なり、本教々徒たる

ものは『千代の面影』を購めて祖先の祭祀を永遠に明かにすべし。

268
225

複製

大教會所祭日表

四月十日	大祭	九月十日	廿二日	廿三日	廿四日	月次祭
四月十一日	招魂祭	十二月二十日	四神君例祭	十月九日、十日	說教	
春季皇靈祭當日	春季靈祭	十月十日	教祖大祭	六月三十日	大祓	
秋季皇靈祭當日	秋季靈祭					

明治四十三年十二月二十九日印刷
 明治四十四年一月一日發行
 明治四十四年三月十一日三版印刷
 明治四十四年三月十三日三版發行
 明治四十四年五月八日五版印刷
 明治四十四年五月十日五版發行

明治四十四年二月十一日再版印刷
 明治四十四年二月十三日再版發行
 明治四十四年四月八日四版印刷
 明治四十四年四月十日四版發行
 明治四十四年八月三日六版印刷
 明治四十四年八月七日六版發行
 岡山縣川上郡日里村黑忠三千三百四十九番地

著者 山下鏡影

發行者 飯塚辰太郎

印刷者 守分清三郎

發行所 大教新報社

岡山縣淺口郡三和村大谷三百二十五番地
 岡山縣淺口郡玉島町大字玉島四百拾七番地
 岡山縣淺口郡三和村大谷三百二十五番地

268
225

複製

大教會所祭日表

四月十日	大祭	九月十日	廿二日	廿	月次祭
四月十一日	招魂祭	廿三日	廿四日	月次祭	
春季皇靈祭當日	春季靈祭	十二月二十日	四神君例祭		
秋季皇靈祭當日	秋季靈祭	四月九日、十日	說教		
十月十日	教祖大祭	十月九日、十日	說教		
六月三十日	大祓				
十二月三十一日	大祓				

明治四十三年十二月二十九日印刷
 明治四十四年一月一日發行
 明治四十四年三月十一日三版印刷
 明治四十四年三月十三日三版發行
 明治四十四年五月八日五版印刷
 明治四十四年五月十日五版發行

明治四十四年二月十一日再版印刷
 明治四十四年二月十三日再版發行
 明治四十四年四月八日四版印刷
 明治四十四年四月十日四版發行
 明治四十四年八月三日六版印刷
 明治四十四年八月七日六版發行

著者 山下鏡影

發行者 飯塚辰太郎

印刷者 守分清三郎

發行所 大教新報社

岡山縣淺口郡三和村大谷三百二十五番地
 岡山縣淺口郡玉島町大字玉島四百拾七番地
 岡山縣淺口郡三和村大谷三百二十五番地

